

モンスター娘に襲われる ASMR クラーケンのリーネ編

(Attacked by a Monster Girl ASMR -Kraken Girl Line Version -)

あらすじ：

冒険者が何度も訪れる大樹海。そこには海さえ存在する。

珍しい魚を釣りにきた冒険者の君は、逆に海に棲むクラーケン・リーネに捕らえられる。海中で暇を持て余す彼女は、人間を気に入り、交接腕を使って徹底的に犯し始める。

そして最後には自分の執事になるよう命じるが……冒険者が意地でも帰ろうとする場合は、決して開けてはならない財宝を渡すのであった。

登場キャラクター：

クラーケンのリーネ：

樹海の底で暮らすお嬢様。屋敷は立派だが、陸に上がってはならないといわれているため退屈している。屋敷には財宝がたくさんあり、その財宝で空気を作り出せる。年ごろなのでセックスにも興味津々。お嬢様言葉でごまかしているが、実はなかなか口が悪い。スミを吐いて自分の分身を作り出せる。従順な相手には優しくするが、自分の意思に沿わない相手には冷たくなるヤンデレ気質もある。開けた者を人形にしてしまう魔法の箱を持っている。

少年冒険者：

樹海の珍しい魚を釣りにきた少年だが、逆に釣り竿にかかったリーネに海に引きずり込まれてしまう。当初は溺れかかるが、リーネの魔法で呼吸ができるようになった。開けてはならない小箱を開けるなど好奇心にはかなり弱い。

(※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります)

1. 出会い ～海中のお屋敷～

リーネ「んん～……？」

リーネ「んん～？ ……あらあ～？ これであってるの……かしら？」

リーネ「んん～……？ いまいちわっかんねえですわね～。陸のこと、わたくしなあんにもわかりませんし……」

リーネ「我が家に伝わる宝の一つですから、大丈夫だと思うんですけども……」

リーネ「あらま！」

リーネ「あらあら、そんなにむせて……大丈夫ですよ？」

リーネ「落ち着いて～……ほ～ら、深呼吸ですよ～」

リーネ「うふふ、ちゃんと呼吸できるようになったからしら？」

リーネ「ご安心あそばせ。我が家の宝を使いましたから、もう大丈夫ですわ。ほら、ちゃんと呼吸できてるでしょう？」

リーネ「命が助かって良かったですわね～♪ わたくしもきったねえ水死体の処理をする必要がなくなって、一安心ですわぁ～♪」

リーネ「わたくしはリーネ。クラーケンのリーネと申しますの」

リーネ「陸に帰るのは諦めてくださいまし？ あなたはもう、わたくしが陸から引きずり込みましたので……ここで暮らすしかありませんの」

リーネ「なあんにもねえ、つまらない深海ですが……くすくす、あなたがいたら、ちょっとは楽しくなるかもしれませんわね」

リーネ「あら、この触手が怖いですか？ クラーケンを見るのは初めて？」

リーネ「だあいじょうぶ、とって食いやしませんわ。せっかく陸から深海に連れてきた人間ですもの、いろいろと遊んで、楽しまないと……ね♪」

リーネ「そうそう、お父様が後継ぎがどうか、うるさいからあ……」

リーネ「あなたには、そのちんぽが枯れるまで、交尾のお手伝いもしてもらいますからね……♪」

リーネ「いっぱい楽しみましょうね、人間さん♪ ふふふっ♪」

2. 触手耳かき ～触腕で味見～

リーネ「そういえば～……あなたはそもそも、なんでここに来たか覚えてらっしゃいますの？」

リーネ「あらま、覚えていない？ そう……」

リーネ「あなたねえ、樹海の中にある海で釣りをしてたんですよ。なんか珍しい魚でも釣ろうとしたんですの？」

リーネ「そしたらあなたの釣り針が、わたくしの自慢の触手にみごと引っかかり……わたくし怒り心頭ですわ～！」

リーネ「あまりにムカついたんで、えいやあつ、と釣り針を引っばったら、あなたが釣り竿ごとくっついてきたって寸法ですよ」

リーネ「わたくしのところにつくころには、あなた心臓止まってましてよ～？ 我が家にたくさんある宝物で、蘇生させて……」

リーネ「魚のエサになる前に、このお屋敷に連れてきてあげましたわ～！ 寛大なわたくしに感謝なさって～？ おーほっほっほ♪」

リーネ「ここは樹海の海の底……水に棲むモンスターたちが暮らしていますわ～」

リーネ「わたくしはクラークン族で……まあ、イカの魔物ですわね。それでも高貴な身分なんですのよ？ 家族からは陸に上がるなと言われていて、ちょっと……いや、すんげえ～退屈なんですけども～」

リーネ「ちょうど退屈しのぎに……わたくしに忠実でえ、なんでも言うこと聞いてくれてえ、一切文句を言わない有能な執事が欲しかったんですの」

リーネ「あなたがわたくしの執事にふさわしいか……これからたっぷり面談してあげますわあ」

リーネ「うふふ……まずは……あなたの味を見てさしあげますわよ……」

リーネ「好みじゃない味だと、触手でからみついても……吐き気がして仕方ないですもの……せめて美味しい味の人間じゃないと、触手で抱きつけませんから……」

リーネ「え？ なんの話かって？ うふふっ……♪」

リーネ「もちろん触手の話ですわあ。クラークンの触手にはね、味覚を感じる機能がございますのよお」

リーネ「陸の生物に絡みつくのは初めてだから……どんな味がするのか楽しみですわ～。じゃあ、早速……♪」

リーネ「ほおら、わたくしの触手が、あなたの耳にい……入っていきますわよお～♪」

リーネ「あらっ……ふむふむ……んん～？」

リーネ「あらあらまあ～♪ あなたの耳、意外とうんめえ～ですわねえ～♪」

リーネ「陸の生き物なんてどんなお味かと思いましたが、なかなかイケるじゃありませんの～♪」

リーネ「気に入ってしまいましたわあ～、もっともっと味合わせてくださいませ～♪」

リーネ「は～い、触手が、ぐじゅぐじゅぐじゅ～っ……って、耳の中をいじっておりますわよ～？」

リーネ「あらまあ～、口をだらしな～く開けて、気持ちよさそう～。そんなにいいですか～？ 耳の中、触手でいじられるの～♪」

リーネ「んん～……♪ あなたの皮膚、とってもデリシャス……んっ、ああんっ……いいですわよお……美味しい人間さん……♪」

リーネ「これからわたくしに仕えるんですから……わたくしの触手にも慣れてくださいまし～。ほ～ら、触手の先端をお、耳に差し込んでえ……ぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅう～♪」

リーネ「んん～……ちゅぽっ……っとお♪ んふふふ、いかがだったかしら？」

リーネ「あらあらあ、目がトロンとしておりますわよ～♪ わたくしの触手でいじられたの、そんなに嬉しかったんですの～？」

リーネ「味見はもう十分ですけどお……そんなに喜んでくれるなら、もおっとサービスしてあげちゃおうかしら」

リーネ「それじゃあ、前に、移動して……ほうら、来てあげましたわよ～♪」

リーネ「さっきと同じように、左耳にもわたくしの触手を挿入して……なさけなくヒイヒイって、言わせてやりますわ～」

リーネ「さ、お覚悟なさって……」

リーネ「ほうら、吸盤のついた粘液まみれの触手があ……あなたのお耳に入っちゃいますわよ～♪」

リーネ「ああ～、いい顔～♪ わたくしの嗜虐心がぞわぞわ刺激されますわ～♪」

リーネ「イカのモンスターに、触手挿入されてえ、そんなに気持ちいいんですのお？ あらあらまあ、とんだド変態さんですわねえ～♪」

リーネ「それともこの触手、リラックス効果とかあるのかしら？ 聞いたことね～ですわね。ま……どうでもいっか♪」

リーネ「は〜い、耳の奥、隅から隅までえ……ぐちゅぐちゅつ……ぬちゅぬちゅ……ずっぽずっぽ……♪」

リーネ「耳から脳髓とろけそうなほど、気持ちいいでしょう〜♪ で、もお……まだまだ本気じゃありませんことよお〜♪」

リーネ「おほほほ♪ わたくしの本気耳責めはどうかしらあ〜♪」

リーネ「耳だけで絶頂してもよくってよお〜……そんなにだらしなく口を開けて……わたくしの執事にしてはブサイクですけども〜♪」

リーネ「今だけは許してあげますわあ。ほうら、わたくしの触手、吸盤の一つ一つまで、お耳でよく感じてくださいまし〜♪」

リーネ「あらあ〜、右耳にも入っちゃいましたわあ〜！ ごめんあそばせ♪」

リーネ「両方のお耳をじゅっこじゅっこされる気分はいかが〜♪ って、聞くまでもねーですわね♪ そんなに喜んでもらえてわたくし、嬉しいですわあ〜♪」

リーネ「んふふふ、触手からあ、クラーケンの粘液もたっぷり分泌してえ……」

リーネ「手加減なしの触手ピストンで……人間さんのお耳にい……いれたり……だしたり……んふふふ♪」

リーネ「おほほほ、クラーケンの耳いじり、そんなに気に入ってくれましたの〜♪」

リーネ「それじゃあ、このまま永遠に、耳いじりしましょうかしら〜？ 触手は十本ありますから、2本くらいずっと耳に差し込んでいても、どうってことはありませんわよ〜♪」

リーネ「ほうら♪ じゅっこじゅっこ♪ じゅっこじゅっこ♪」

リーネ「……んふふ、なーんてね」

リーネ「さすがにずっとなんてやってらんねーですわ。ちょっと名残惜しいけど、ここで、おしまい……♪」

リーネ「味見は十分できましたし……今度はもっと、あなたのことをリーネに教えてほしいですわ……」

リーネ「交尾はそのあと……んふふ、まだまだ人間で試したいことがたくさんありますのよ……耳だけで遊ぶなんて、もったいない……♪」

リーネ「すぐギブアップとか、許しませんわよ？ ちゃんと頑張ってくださいまし、執事見習いさん……？」

3. 触手コキ ～吸盤交接腕～

リーネ「それでは早速、わたくしの高貴な触手を使って、人間のお精子を搾り取ってさしあげますわぁ」

リーネ「いかがかしらぁ、わたくしの立派なしょ、く、しゅ♪ どこにでも張りつけるし、味もわかるし……セックスだってできちゃうんですのよぉ」

リーネ「交接腕といいまして、精子を触手の中で保存して、好きな時に授精できるってわけですわ、まあ便利♪」

リーネ「お世継ぎたくさん欲しいですから、あなたは触手セックスに早く慣れて、たくさん射精できるようになってくださいまし？」

リーネ「ほうら、すごいでしょ……こうやって触手であなたの腕をつかんで……自由にできちゃいますのよ～」

リーネ「あなた、私には力で絶対にかないませんから……うふふ、抵抗しても無意味ですわ～♪」

リーネ「あぁッ!? やっべーですわ……ついつい力を入れすぎて……!」

リーネ「しよ、少々お待ちくださいましっ! え、ええと……骨は折れてませんわね? 関節が外れただけ? じゃあ、ええと、ここをこうして……」

リーネ「オラァッですわっ! ……ふうう、これで戻ったかしら? 大丈夫? ちゃんと足は動きまして?」

リーネ「ふう、マジ焦りましたわ……もう! 人間ってば脆弱なんですから! これからはわたくしに仕えるものとしてしっかり鍛えてくださいまし!」

リーネ「さてっ、と……関節も戻せましたし、触手セックスを始めますわよ～」

リーネ「はぁ～い、服は脱ぎ脱ぎししましょうね～♪ ここは水中ですから、こんな邪魔くせーもの、いりませんわよぉ?」

リーネ「あらぁ、かわいらしいおちんぼ♪ ふふふ、そうですわよね～、まだ子どもですものね～」

リーネ「大丈夫、今からわたくしが、触手で立派なセックス執事にしてあげますわよ～♪」

リーネ「ほうら、わたくしの繊細な触手の先っぽが……あなたのかわいいちんぽに巻き付いていますわよぉ～」

リーネ「細っこい先端がぁ、ちんぽの根本からぐるっと回って……少しずつ少しずつ……上のほうに～……」

リーネ「ほうら、ぐるぐる、ぐるぐる～ですわぁ～♪ あらまあ、もうカリのところも……ぐるう～～～と巻いてえ……」

リーネ「おほほっ、ちんぽがすっかり触手に巻き付かれてしまいましたぁ～♪ いかがかしらあ、一番敏感なところを包まれる感触は……」

リーネ「男性の急所を聞いておりますから、もちろん、大切に扱いますわよぉ～、クラーケンの粘液もたっぷり出て、気持ちいいんじゃないありませんこと？」

リーネ「あらあら～♪ そんなに喘いでしまっぺ～……うふふ、まだ本気を出していませんのに、そんなことで持つのかしら」

リーネ「もぉ～っとすごいことをしてあげますわぁ～。ほうら……」

リーネ「うふふ……きゅ～っ……ぽん♪ きゅ～っぺしてからあ……ぽん♪」

リーネ「わたくしの触手が吸い付く感触はいかがかしら？ ……って、あらあら、答えを聞くまでもないようすわね」

リーネ「気持ちいいって顔をなさってますわぁ～♪ ちんぽを無数の吸盤で吸い付かれるの、極上でしょう～？」

リーネ「本気で吸い付くと、皮膚がはがれてしまいますからね～……優しく……優しく……っと」

リーネ「たくさんの吸盤で……おちんぽにちゅうちゅうキスしてあげますわよぉ～……ほうら、ちゅっちゅっ……ちゅっちゅっ……」

リーネ「んふふ♪ 吸盤キスで、おちんぽがバッキバキに固くなってますわね♪ そんなに射精したいのかしら？」

リーネ「わたくしの交接腕で、受け止めてあげるから……どろどろの精液、たっぷり放出してくださいまし～♪」

リーネ「では、吸盤をきゅぽん♪ って外してから～……」

リーネ「粘液まみれの触手で、根元からカリまで……ぐじゅぐじゅしごいて差し上げますわね～♪ ぐじゅぐじゅ～♪」

リーネ「どうかしら、クラーケンの触手コキは～」

リーネ「人間の指よりも、よっぽど器用に動かせますわよ～。ちんぽの頭から先まで、完璧に巻き付いておりますから……お好きなところを締め付けてあげますわよ～」

リーネ「根元をぎゅううう～……ってするのでもお……触手の先っぽで、ちんぽの穴をくちゅくちゅするのでも……うふふふ、どれがいいのかしらあ～」

リーネ「あら、全部がいいんですのお？ とんでもねー欲張りさんですわねえ。でも構いませんことよお〜♪」

リーネ「ほら、ちんぽの根っこを締め付けてからぁ……尿道のところを、触手の先っぽでくちゅくちゅいじってえ〜♪」

リーネ「あらまあ、腰がへこへこしてますわよ〜♪ うふふふ、性器に挿入したわけでもないのに、もうセックスの気分になっちゃってるのかしらぁ〜」

リーネ「まあ、交接腕も性器といえるのかしら？ だったらこれも間違いなくセックスですわね〜♪ わたくしの性器でたっぷり気持ちよくなってくださいまし〜♪」

リーネ「あらあら、無様に息が荒くなってまいりましたわね〜。もう射精我慢できないのかしら〜」

リーネ「いけませんわよお、わたくしの執事なのですから、どんな時でも品格がないと……えっ？ もう無理？ 我慢できない？」

リーネ「仕方ないですわね〜。最初だから出血サービスですわぁ〜♪ ほうら、触手をひときわ、ぎゅううううって締め付けてえ……」

リーネ「ついでにさきっぽも触手でぐちゅぐちゅぐちゅ〜っとしてあげればぁ……」

リーネ「あっはぁ♪ でしたわぁ♪ どろどろのお精子がこんなにたくさぁん♪」

リーネ「おほほほ、尿道に触手を差し込んでるのに、隙間からびゅるびゅるあふれておりますわっ♪ どんだけため込んでたんですの〜？ くっせえですわね〜♪」

リーネ「ご安心なさってえ♪ 無駄撃ちにならないよう……飛び出した精液は、ちゃんと触手で飲み込んでさしあげますからぁ……♪」

リーネ「ほうら、触手の先端でえ……精液をごくっ……ごくっ……と♪」

リーネ「あはぁあん、濃いつ。ぷりっぷりの生まれたて精液が……わたくしの触手の中に入ってきますわぁ♪」

リーネ「んんっ……んぐっ……んむっ……うへえ、にっがぁぁ〜♪ でもこれで……んふふふ、精液回収、完了……っ」と

リーネ「おほほ、びっくりしまして？」

リーネ「交接腕と言いましたでしょう？ 精液を触手の中に保存して、いつでも好きな時に取り出せるようになっておりますのよ」

リーネ「粘液が固まってカプセルのようになりますわ〜♪ これを体内に保存して、いつでも、あなたの精子で受精できるって寸法ですわよ、すんげーでしょう？」

リーネ「くすくす……まあ、でも、あなた、まだまだ精液だせそうですわね♪」

リーネ「射精したばかりなのに、まだちんぽががっちがちですもの♪ それなら……」

リーネ「今度は交接腕ではなくて、わたくしのなかに直接、精液注いでもらおうかしら……？」

4. 性交 ～触手でも性器でも～

リーネ「それではあ……んっ、次は直接、わたくしにおちんぽ挿入してもらおうかしら」

リーネ「んふふ、クラーケン触手だけじゃなく……ちゃん人間みたいにおまんこもありますのよ？」

リーネ「ほら、こ～こ♪」

リーネ「触手の中心にい……くばあ～って、大きな穴がありますでしょう？」

リーネ「普通のイカだったらここが口ですけど……クラーケンはここが性器ですわよ～、異種族とのセックスではこっちを使うんですの」

リーネ「あなただって、ちゃんと女の子の穴にいれたいでしょう？ いいですわよ、今日は特別に、わたくしとのセックス♪ 許可してあげますわあ～♪」

リーネ「は～い、こっちにいらっしゃいまし～」

リーネ「触手でわたくしのほうに引き寄せてあげますわあ～♪ そのまま……んっ、そうそう、ちんぽをお、わたくしのおまんこに当てがって～……」

リーネ「はあんっ♪ きましたわあ……陸から引きずり込んだ人間のお……おっきなおちんぽお……」

リーネ「んんっ、ああんう……はあっ……粘液でぬるぬるだからあ、ずりゅうって奥まで入っちゃいましたわね♪」

リーネ「ほらっ、んんっ、最初はゆっくりでいいですわよ～♪ あんっ……んっ……少しずつ、前後に……んっ、動かしてえ……」

リーネ「クラーケンのおまんこに……おちんぽずぼっ、ずぼってえ……んっ、はあんっ……これ、結構、イイかも……♪」

リーネ「自分の触手で結構いじったりしてましたけどお……んうっ、本物のおちんぽをいれるのは初めてですからあ……はあんっ……」

リーネ「あなたもどうかしら？ おまんこ気持ちいい？ ふふっ、クラーケンの処女お嬢様と交尾なんて、とんでもなくレア体験ですから、喜んでくださいませいね？」

リーネ「んんっ……んあんっ……いんっ……あふっ……そうそう、いいですわあ、奥までずんっ、ずんっ……って♪」

リーネ「わたくしのおまんこ……きゅうきゅうするでしょう？ 水中で交尾しても、絶対に精子逃さないように……隙間なく締め付けるんですよ」

リーネ「あはぁん♪ あなた、いい顔なさってますわぁ。男の人って交尾の時、そんな顔なさるのね……あんっ……はぁっ……ふふふ♪ 勉強になりますわぁ」

リーネ「ほうら、わたくしのお……んふっ……吸引おまんこでえ……いっぱい気持ちよくなって……構いませんのよお……うんっ……」

リーネ「そうそう……んんっ……いちにっ、さんしっ……ゆっくりでいいからぁ……あんっ、奥まで、ピストンっ……あはんっ……やあんっ……！」

リーネ「いいっ、いいですわっ……あんっ♪ 自分の触手とは違う、かたあいおちんぽお……んんっ……もっともっと突いてえっ♪」

リーネ「ああんっ……！ んんっ……おっ……んはっ……はぁっ……んんっ、ん！ あんっ……！」

リーネ「ああんっ……ふふっ♪ やだぁ、盛り上がってついつい……触手で抱きついちゃいましたわぁ」

リーネ「ほうら、触手でサポートしてあげるからぁ……もっと激しく……んっ、あなたのおちんぽでえ、リーネの奥まで突いてえっ♪」

リーネ「うあぁはぁんっ！ ずこずこきたぁぁっ！ んん！ あんっ！ はぁんっ！ ん……あううっ！」

リーネ「人間を触手でつかんでえ……がしがし交尾するのすごいですわぁっ！ あんっ、人間オモチャにしちゃってるう♪ んふふっ……♪」

リーネ「おんっ！ ほおんっ！ んんおおっ……♪ おっ、やっべーですわぁ♪ お嬢様が出しちゃいけない声上げてるうっ♪ んんんおほおっ……」

リーネ「……あはぁ♪ わかりますわよ、出したいのねえ？ お嬢様おまんこに精液出したいんでしょう！ おちんぽがびくびくしておりますわよ♪」

リーネ「んんおうっ！ いいことお？ わ、わたくしと一緒にイクんですのよお！ わたくしの最高に気持ちいいタイミングで、精液出してえっ♪」

リーネ「はぁあんっ、わたくしもね、もうすぐイクからぁっ。すぐイクからぁ……ほら、ほらっ、吸盤に負けないくらい、おまんこ締め付けてあげるからぁぁっ」

リーネ「んほおっイクっ、人間ちんぽでイクっ、わたくしを昂らせなさい！ さぁ、さぁっ！ んひいっ！ そこおっ、んおっ！ おほおっ！」

リーネ「んおおおくる！ 気持ちいのくる！ おまんこびくびくするうっ……んおおイクっ！ イキますわっ！ イクイクイクイクイグううう——っ！」

リーネ「くひいいいんっ！ おまんこに熱い精液っ！ どばどばきたあぁっ！」

リーネ「おっほう♪ んおおおう！ ひぐううっ！ 熱いっ、あっ……すごっ……おまんこ精液で……いっぱい……」

リーネ「はあっ……んあぁあっ……あー……やっぺ……すご……人間交尾って……こんなに……すっげーんですわね……♪」

リーネ「はああんっ……うふうっ……よかったですわぁ……」

リーネ「これならぁ……あっ……んっ……わたくしの執事も、十分務められますわね……うふふふ♪」

リーネ「ダメちんぽだったら魚のエサにしまおうと思いましたけど……とんでもねーですわ。絶対逃しませんことよ」

リーネ「これからよろしくお願いしますわね……新しい執事さん……うふふふ♪」

5. 休憩 ～触腕マッサージ～

リーネ「んんっ、ふう～……交尾って結構疲れますのね～。一日中泳いだような気分ですわあ～」

リーネ「あなたはどうか？ 疲れてらっしゃらない？」

リーネ「……ふふ、そうですわよね。初めての交尾、くたくたですわよねえ。もう立てないって顔してますわあ～」

リーネ「せっかくだし……わたくしが、自慢の触手で、マッサージしてあげてもよろしくてよお」

リーネ「あらっ、ご遠慮なさらず～。ほらほら、そこに寝そべってくださいまし～。ほうら、よっと♪」

リーネ「は～い、そこに横になって……では今からわたくし、寝そべったあなたのこと、触手でマッサージさせていただきますわあ～」

リーネ「執事をいたわるのもお嬢様の務めでしてよ～。それでは……あなたの足から、やっていますわね～」

リーネ「あッっ♪ あらあら、かなり凝ってますわね～……慣れない環境で、緊張しているのかしら？ よおくほぐしてさしあげましてよ～」

リーネ「ほうら、んしょ……よいしょ……力加減はいかがかしら～？ ご希望があったら言ってくださいましね～」

リーネ「ふんふんふん～……粘液ぐっちょぐっちょの触手で～……人間様のお体を～……ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅううう～……♪」

リーネ「ぐにぐに～♪ ぐっちょぐっちょ～♪ はい、次はお腰をやっていきますわよお～」

リーネ「交尾の時、お腰を使ってへこへこ動いてましたものね～♪ よお～くほぐしてあげますわあ～……ぐっちょぐっちょ……と♪」

リーネ「おほほほ、わたくし、腰とかないですからあ……お腹から下は全部触手ですから、よくわかりませんが、陸の生き物は腰とか、すぐ壊れそうですわね～♪」

リーネ「なるべく長持ちするように……うふふ、しっかりほぐしてさしあげませんと……ん～しょっ、よいしょっ……」

リーネ「はい……次はお背中ですわあ～、ここも凝りますものね、大変ですわね～♪ わたくしは水中に適応しているから、凝りとは無縁ですけども……♪」

リーネ「はい、いっちに、さんし……いっちに、さんし……触手でいっぱい、もみほぐしてえ……」

リーネ「あらあら。交尾とは違う声をあげてらっしゃいますわね～。気持ちいいんですの？うふふふ♪」

リーネ「そんなに喜んでくれて嬉しいですわあ。じゃあ、特別サービスも追加してあげますわよお～」

リーネ「はい、ぎゅう～～～♪ 吸盤でお背中に吸い付いておりますわよ～」

リーネ「適度な吸引で……んんっ……お肌に張りを与えますわよ～♪ わたくしも自分の顔によくやっておりますわ～♪ ふうっ……ふうっ……」

リーネ「んんっ、んしょっ……えいっ……えいっ……んむっ～」

リーネ「うんっ……ほっ！ よいしょっ……えいっ……んんっ……んんんっ」

リーネ「美容効果抜群でしてよお～。ほうら、背中以外にも、顔や、腕に……きゅぽっ、きゅぽっ……きゅっぽん、と♪」

リーネ「はあい、吸盤と、触手を使ってえ……特別なお嬢様マッサージですわあ。んんっ……よいしょ……えいっ……んんっ……」

リーネ「力をいれすぎないで……でも、ほどほどに強く……えいっ……んんむ～っ……えいっ……んっ、んっ、んんん～～～～っ」

リーネ「……きゅ～～～……ぽんっ♪ ふうう、これで大体終わりましたかしら。あ、もう立ってもよろしくてよ？」

リーネ「おほほほ、さっきよりスッキリした顔をなさってますわね♪ 頑張った甲斐がありましたわ♪」

リーネ「さ、今日はもうお休みになって……明日からも交尾を頑張ってくださいましたら……わたくしがまたマッサージしてあげてもよろしくてよ。おほほほほ♪」

6. 趣向を変えて ～スミ吐きで分身形成～

リーネ「ふんふんふん～♪ るんるんる～ん♪」

リーネ「おはようございますわ～♪ わたくしの執事様、この屋敷の生活にも慣れたかしら？」

リーネ「まあ、あなたは呼吸の問題で、この屋敷からは出られないんですけども。無残に溺死してしまいますものね」

リーネ「必要なものは用意しますわ～♪ なんでも言ってくださいまし～♪」

リーネ「さて、今日のおセックスなんですけども……」

リーネ「ちょっと趣向を変えまして……面白いことをやってみたいと思っていますわ♪」

リーネ「わたくし、飽きっぽいんですの。いつも同じじゃイヤなんですわ。というわけで……わたくしの分身を作って、2人でおセックスしましょう♪」

リーネ「ああ、分身といっても、別にどこぞのスライムみたいに分裂するわけじゃありませんのよ？」

リーネ「わたくし、墨を吐いて、わたくしそっくりの分身態を形成することができますの……やべーやつに襲われた時の緊急対処ですわぁ」

リーネ「コミュニケーションはとれませんし、数時間で消えてしまいますけれども……一緒におセックスするなら、いろいろとできるかなあと思ひまして♪」

リーネ「じゃ、ちょっと墨を吐き出しますわね♪ んんん～……くちゅ～んちゅ……むぐむぐ……んんむむ……」

リーネ「んんっ……じゅばっ……んああええ～……えろお……んええ……れるうう……じゅぷ……ん……べえええ～……」

リーネ「んっ……じゅぶ……れろお……んへええ～……♪」

リーネ「あらあら、はしたなくてごめんなさいね。いま、墨を吐き出しておりますので……ほら、出した墨が固まってますでしょ？」

リーネ「これがだんだん、わたくしの分身になりますのよ。ちょっとお見苦しいかもしれませんが、ごめんあそばせ」

リーネ「では……んん～……んむっ……んんんちゅ……くちゅくちゅっ……じゅるっ……んはああ～……んべえええ～……んああああ～……」

リーネ「ああええああ～……あええええ～……じゅぶうっ……んんんええろお～

〜〜〜……♪」

リーネ「んべええろお……んちゅっ……むちゅう……んんむ……えええろお〜……あああ
あええ〜……じゅぶっ、えろおおおろお〜〜〜〜……………」

リーネ「ふうう♪　ざっとこんなもんですわあ♪　うふふ、墨を全部吐き出したから、もう
からっぽでしてよお」

リーネ「さて、改めまして、こちらの真っ黒なわたくしが、分身の墨ちゃんですわ。さあ墨
ちゃん、執事にご挨拶なさって〜♪」

リーネ「あらまあ〜、上手にお辞儀できて偉いですわあ〜♪　さすがはわたくしの分身、う
ふふふ♪」

リーネ「じゃ……これから執事に、こちらの墨ちゃんと二人で色々してあげましょうね……
うふふふ、お覚悟なさいませ……？」

7. 二回戦 ～分身と前から後ろから～

リーネ「んふふ、墨吐きで分身もできましたし……うふふ♪　じゃあ、早速おセックスいたしましょうか～♪」

リーネ「あ、墨ちゃんは後ろのほうからね？　はい、執事さんに回りこんで～」

リーネ「は～い、今、墨ちゃんが後ろから抱きついてますわぁ～♪」

リーネ「わたくしの分身だから……ふふっ、墨ちゃんも執事さんがだあいすき♪　なんですわねえ～♪」

リーネ「背中が墨で真っ黒ですけど、別に構いませんわよねえ？　わたくしがお口から吐き出した、とっても高貴な墨ですものねえ♪」

リーネ「じゃあ、早速、おちんぽをお……」

リーネ「そ～れっ♪　墨ちゃんの触手が、おちんぽに巻きついておりますわよぉ～」

リーネ「では触手でしごきながらぁ……わたくしがこのおちんぽくわえて、しゃぶってさしあげますわね～♪」

リーネ「うふふ♪　ご主人様にご奉仕させるなんて、いけない執事ですわぁ……こうやって……あなたの前にひざまずいて……フェラチオさせるなんて……」

リーネ「クラーケンの吸いつき、堪能してくださいませ～♪　では早速……あ～むっ、むじゅう、じゅるうっ♪　れろおろおお～♪」

リーネ「んおっ……おひんぽおいしいい♪　じゅぶっ……はぶっ、んむっ……じゅぶうっ、んんっ……」

リーネ「じゅぶっ……じゅるるう、はぶっ……んむうっ……んんっ……」

リーネ「ぷはぁ……っ♪　うふふ、ど～お？　墨ちゃんの触手で、おちんぽの根本ぎゅ～ってされながら、先っぽをご主人様にしゃぶられるのはぁ～♪」

リーネ「おほほ♪　好き好き～って顔してますわねえ♪　じゃあもっとしゃぶってあげますわぁ～♪」

リーネ「はぁむう……んんっ♪　じゅぶっ、れろおおっ、ずるっ、じゅろろろろお——……」

リーネ「んんっ、んおっ！　んぶっ、んっ！　じゅぶ……！」

リーネ「んんんっ♪　はぶっ！　んんぶっ、んちゅうっ……ぷはぁぁ♪」

リーネ「ふう～……あごが疲れましたわぁ……」

リーネ「ん～、でも……くすくす、おかげで、おちんぽばっきばきになっちゃいましたわね

え〜♪」

リーネ「優秀な執事で嬉しいですわあ〜♪ それじゃ、また今日も、おセックスしましょう……ね？」

リーネ「さ、今日はあなたが上になって……おちんぼ入れてくださる……？」

リーネ「はああんっ……おちんぼきたああっ……」

リーネ「はああっ……んんっ……あんっ……やああっ……おまんこにおちんぼ差し込まれてえ……体がびくびくしちゃうんっ……触手はねちゃう……」

リーネ「んんあっ……いいですわあ……♪ んんっ、わたくしの執事さん、しっかりおセックスが上達して……はあんんっ♪」

リーネ「ふふふ、わたくしの上にまたがって、おちんぼ挿入して……背中からは、墨ちゃんにのしかかられてますわねえ？ ……あんんっ♪ 二人分の体重かけるピストンすっごいい♪」

リーネ「んっ、力強いおセックス、もっとしてえっ♪ はああっ、んあっ、あんんっ♪ いいっ♪ おちんぼずこずこっ、いいですわあっ……♪」

リーネ「ああんっ♪ あら……？ 墨ちゃん、どうしたんですのお」

リーネ「あらああ〜♪ うふふ♪ 墨ちゃんも我慢できなかったんですのお？」

リーネ「執事さんのお耳に、真っ黒な触手、挿入しちゃいましたわねえ♪ うふふ♪」

リーネ「んんっ……挿れたり、挿れられたりでえ、もうわけがわかんねーですわねえ？ うふふ、ほらほら、耳かきによがってないでえ、こっちも動いてえ……♪」

リーネ「んンおおっ♪ すっごい腰ふりきたああっ♪ んんあっ……はんっ……ああんっ……いいっ……ひぐうっ……んいっ……あんんっ♪」

リーネ「耳の中いじられて興奮しちゃったんですのお？ なんでスケベなっ、あんっ、執事なのかしらあっ……んああんっ……はんっ！」

リーネ「もおう……♪ 触手を片耳にいれただけで、こんなにつよピストンするならあ……ふあんっ……両耳に挿入したらあ……どうなるのかしらねえ……？」

リーネ「ああ〜んっ……いいですわあ……墨ちゃんに両方耳かきされてえ……情けなく涎たらしちゃう顔……んんっ……あんう！ 興奮やべーですわねっ♪」

リーネ「ほうら、もっともっとくちゅくちゅされてえ……全身わたくしの触手まみれで、おセックスするんですよ〜♪ ほら、ほら、ほうらあっ！」

リーネ「ほおおおんっ!? あんっ、激しいピストンきたあっ！ おおっ、んおっ……はあん

っ！ んんおおっ……」

リーネ「やっぱあつ、専属執事のお……はげしめピストンやペーですわあっ！ ほひいっ！
ゃんっ、いいっ！ 奥にごつごつ当たるううっ！」

リーネ「くひいっ！ これやべっ！ すんげーですわっ！ 卵巣刺激されちゃうん
っ！ おっほおお、いっぱい卵産みたくなりますわっ！ おっ！ んおっ！ んおおほ
おっ！」

リーネ「ああはんっ……いいっ……んひいっ！ はああっ！ おんっ！ んほおっ！ あ
っ、やべっ……はあっ！ あんっ！」

リーネ「ひいんっ！ ああんっ……ほおおんっ！ いいですわあ、交尾最高ッ！ ああん
っ！ 神経びくびくしちゃうんっ！」

リーネ「もっと！ もっとしてえっ！ あんんっ！ 触手まみれでがしがし交尾してくだ
しましっ！」

リーネ「んんあはあんっ！ ほおおっ、おまんこ溶けるっ、バカになるうっ！ お嬢様お
まんこ、人間ちんぽにかきまわされるううっ！」

リーネ「あああんっ！ これ、もう、限界ですわあっ！ わたくしイクっ！ ほおおんっ！
おほおおっ！ おちんぽに、はしたなく突き回されてイきますわあっ！」

リーネ「くひいっ！ あなたもおっ、あなたもイってくださいませえ！ わたくしの卵巣に、
たっぷり子づくり精子かけてええっ！」

リーネ「おっほおお！ すっげーのくる！ お嬢様アクメきますっ！ あっ、ダメっ、も
うダメっ、イクッ！ あーダメダメっ！ イクイクイクイグううううっ！」

リーネ「くひいいいいんっ！ やけどしそうな精液きたあああんっ！」

リーネ「おっ、おおんっ……！ わたくしの高貴なおまんこにいい……人間精液、あんっ
……くひっ、びしゃびしゃきたああ……っ」

リーネ「おっ♪ おんっ♪ あーやっぺえですわ……イクの止まらな……あんんんっ！
小刻みにいい……びくびくイッてるうう……おおおんっ！」

リーネ「おっほっおお!? んおおおっ！ 待って！ イッてる！ わたくしもイッて
ますからああっ！」

リーネ「んんひいっ！ 墨ちゃんに耳いじられて、また興奮しちゃってるうっ！ 待って、
もう終わりですわよ!? これ以上は……おおおんっ!?」

リーネ「んんああっ！ 無理い！ 浅イキしてたところ、がんがん突かれたらまたイグうっ！
またイグのおっっ！」

リーネ「あー、これやばっ……マジでやばすぎ……んおおおっ！ 感じたことのないアクメ

きますわあっ！」

リーネ「わたくしお嬢様なのがいい……人間ちんぽでっ！ はしたなく全力アクメするの
おおっ！ イグッ！ あーイクイクイクイグイグウー——ッ！」

リーネ「んんおおおおお——ッ！ 連続精子、卵巣にいっぱいきたあああっ！」

リーネ「はあっ……んあっ……はーっ……はーっ……」

リーネ「まったく……よくも……やってくれやがりましたわね……？ わたくし、もう全然、
触手動かさなくてよ……」

リーネ「おセックスの得意な……執事に育てようとは思いましたけれど……あんんっ、こ
んなに滅茶苦茶にするなんて……」

リーネ「次からは少し手加減を覚えさせませんと……」

リーネ「あらあら、今度は墨ちゃんがおセックスしたいのかしらあ」

リーネ「いいですわよお～……わたくしも無理ですから、代わりに墨ちゃんが、その子か
ら精液しぼりにとってさしあげてえ～」

リーネ「あらあら、一瞬で墨ちゃんにとらわれちゃいましたわねえ。もう見えませんわあ～」

リーネ「ていうか、わたくしの分身に、随分気に入られてますわね……わたくしもあんな風
に甘えてみようかしら？ くすくす♪」

リーネ「墨ちゃんが溶けてしまったら、次はわたくしの番ですからね……」

リーネ「せっかく手に入れた地上の人間ですからあ……ふふふ、これからもたっぷり愛して
あげないといけませんわねえ……じゅる、れろお……」

8. 【ルート分岐】質問 ～退屈なの～

リーネ「ああ～……そこそこ。そう……いいですわあ～……」

リーネ「うふふ、あなたがこのお屋敷にきて……もう数日……執事のお仕事にも慣れ始めたかしら？」

リーネ「あんっ、そうそう……♪ 特製のオイル、たっぷり触手に塗ってくださいまし……んっ、はんっ……そう、吸盤にも一つ一つ、丁寧にね……」

リーネ「やっぱりあなたを執事にできて正解でしたわあ。海の底のこのお屋敷、昔からの秘宝はたくさんあっても、ほかに面白いことなんにもねーんですもの」

リーネ「それとも……あなた、もしかして陸に帰りたかったりするのかしら？」

リーネ「未練がある？ ……ふうん、そうなの。わたくしにご奉仕できて、おセックスもし放題の、素晴らしい生活なのに……？」

リーネ「ここを出たら、わたくしともう二度と会えないんですよ？ 寂しくありませんの……？ わたくしは、ちょっぴり寂しいですわ」

リーネ「ふうん、そう……そうなんですのね」

リーネ「では、こんなのはいかがかしら？」

リーネ「あなたがもし、ここにいたいと願うなら構いませんわ。存分にいてくださいまし。わたくしの退屈な生活も、あなたといれば潤いますので」

リーネ「もし帰りたいたなら、手土産にこの小箱をさしあげますわ。小箱を見てわたくしのこと思い出してくだされば、それで構いませんの」

リーネ「この小箱は、わたくしの持つものの中で一番の宝物。これをわたくしだと思って、大事にしてくださいまし？」

リーネ「だけど決して中を見たり売ったりしてはいけませんわよ？ ……いいですわね？」

リーネ「さあ、どうなさるのかしら……？」

リーネ「ずうっとここで、わたくしのご機嫌をとって、一緒に生きていくのか……」

リーネ「それとも、手土産とともに、陸に帰りますの……？」

リーネ「あなたの意思を尊重しますわ……でも、帰るなら、約束は決して破らないでくださいね……」

リーネ「あなたが誠実な選択をなさることを、期待しておりますよ……？ おほほほほ……♪」

9 A. 【性奴隷ルート】産卵セックス ～お嬢様の執事～

リーネ「おはようございますわぁ～♪」

リーネ「今日もいい天気……と言いたいところですが、いつでもどんよりな海の底ですわねえ～。まあわたくし、日光には弱いんですけども……」

リーネ「でもわたくしご機嫌ですわ～♪　なんでって……あなたがわたくしの性奴隷……じゃねえですわ、精子袋……ではなく執事になるって断言してくれましたもの～♪」

リーネ「もう陸には戻れませんけれど……構いませんわよね？　この屋敷の中なら永久に呼吸ができますもの……」

リーネ「じゃあ早速……日課のおセックス♪　いたしましょうか♪」

リーネ「んっしょ……んっしょ……こうやってえ、あなたの後ろまで来てあげてえ……んっしょっと」

リーネ「うふふ、あなたの耳元でささやきながらぁ……こうやって触手で……おちんぼしこしこしてあげますわぁ～♪」

リーネ「後ろからささやかれながら、ちんぽいじられて……うふふっ、気持ちいいのではなくて～？」

リーネ「あはぁ♪　すぐわたくし好みのカリ高ちんぽ、勃起しちゃいましたわねえ～。うふふ♪　そうでないとぉ♪」

リーネ「じゃあ今日はわたくしと触手セックス、いたします？」

リーネ「ほうら、わたくしの触手と、あなたのおちんぽがちゅっちゅっ、ってしてますわぁ～♪　うふふ、仲良し……仲良し…♪」

リーネ「こうやって触手を巻き付けたままぁあ、こすってあげますわよ～。それ、いっちに、さんし、いっちに、さんし……♪」

リーネ「くすくす……せっかく触手が余っていることですし、あなたのカワイイ乳首も、こうしていじってさしあげようかしら」

リーネ「ほうら、触手の先端で……君のカワイイ乳首を……くにゅっ……くにゅっ……って、優しくいじってあげますわよ～♪」

リーネ「こういう器用な作業は得意ですもの♪　ピンク色の乳首があ、触手にいじられて嬉しい、嬉しい～♪　って固くなってきましたわね～♪」

リーネ「じゃあ、こんなこともしちゃいますわよ～」

リーネ「くすくす……は〜い、今ね、触手の吸盤で、あなたの乳首を吸ってまあす♪」
リーネ「乳首を吸盤バキュームされる気持ちはどうかしらあ〜♪ 男の子なのに、乳首ちゅうちゅう吸われて感じちゃってますの〜？」
リーネ「いいですわね〜♪ 乳首いじられて、ちんぽもわたくし好み、かったあいおちんぽになってますわよ〜♪」

リーネ「乳首をいじりながら……おちんぽを粘液と触手で……しごいて……しごいて〜……わたくしの触手が、早く精子欲しいよ〜って言ってますわよ〜」
リーネ「はあんっ……触手から、おちんぽのくっさい味を感じちゃいますわあ〜♪」
リーネ「触手でい〜っぱいしこしこしてあげますから、遠慮なく精子だしていいんですよ〜？」
リーネ「ほ〜らあ、し〜こっ、し〜こっ♪ だ〜せえっ、だ〜せっ♪ 朝一番の特濃精子、わたくしの触手に下さいまし〜♪」

リーネ「はあんっ、おちんぽ震えてきたあっ♪ わたくしの交接腕に、せーしっ♪ せーしっ♪ ほらあ、はやくうっ♪」
リーネ「わたくしの声にあわせてえ……びゅっびゅっ♪ びゅっびゅっ♪ ってしやがれですわ〜♪」

リーネ「はあんっ♪ 来ましたわああ♪ 朝一番のおちんぽ汁♪ んんっ、吸盤の一個一個にまでびしゃびしゃかかるう〜♪」
リーネ「ああんっ、苦いっ♪ 交接腕で、くさくてにっが〜い精子の味感じちゃう〜♪ んっ、んおっ……ごくっ……♪」
リーネ「ぶはあああ〜♪ 朝はやっぱりコレですわねえ〜♪ たまんねーですわっ！ うふふふふ……♪」

リーネ「ふうう……朝一のおちんぽ生しぼりもいただきましたし、今度はこっちでやりましょうかあ〜」
リーネ「はあ〜い、触手の付け根にあるおまんこを……くばあ〜っと♪」
リーネ「射精したばかりでもまだまだビンビンのおちんぽ、おまんこで飲み込んでいますわよ〜♪」

リーネ「あんっ、いきなりそんなに強くう……♪ わたくしが激しい交尾大好きなの、バレちゃってるう♪」
リーネ「はあんんっ……あんっ……ゃんっ……おおおっ♪」

リーネ「あんうっ……はああんっ……一気に奥までえ、ずこっ♪ ずこっ♪ ってえ、くひ
いっ！」

リーネ「はああっ、やだあっ、触手勝手に吸い付いちゃうう。執事に吸盤のキスマークつけ
ちゃいますわあっ」

リーネ「んんっ！ あんうっ！ はああんっ！ んひいっ……ああっ……！ はあんっ♪」

リーネ「おっほおおおんっ！ 激しいのきたあんっ♪ 生殖器の奥までえ、おおっ、おち
んぼで小突かれてるうっ」

リーネ「くひいっ！ んああっ！ おうっ！ んんあんっ！ はあんっ！ んほおうっ！」

リーネ「つよつよちんぼ最っ高♪ いいですわあ、子宮ごんごん刺激されてえっ、高貴な卵、
産卵しちゃいますわあっ」

リーネ「ああっ、触手が勝手にいっ、執事のことちゅうちゅうしちゃうっ！ 吸盤があ、ち
ゅっちゅっ……ちゅっちゅっ……って♪」

リーネ「わたくしもちゅうしますわあっ、ほらあ、舌をお出しになってっ！ キスしながら
腰を振るんですよっ！ むちゅっ、んむっ！ あんっ！ ちゆるう…！」

リーネ「んおおふう！ んんむむっ！ んむっ！ れるうっ、べろっ、ちゆる、れろれろっ
……ちゅううううう～♪」

リーネ「ぷっはあっ……♪ ああん、お嬢様の吸い付きキスハメっ、んんっ！ 良かったで
しょう～♪ あなたのこと、とことんまで吸い付くしてしまいますわよ♪」

リーネ「はああんっ♪ いちゃいちゃキスセックスでえ、おちんぼますます硬くなりました
わあっ♪」

リーネ「ほおっ！ んおっ！ おんんっ！ はあああんんっ！ いいです、いいですわよお、
その調子いっ♪」

リーネ「きますのねえ？ 射精、するんでしょう？ わかりますわよお、ちんぼの先端が膨
らんでえ……あんっ、すごいい、かたあいちんぼでごりごりされてるうっ」

リーネ「出してっ！ 出して！ お嬢様を夢中にさせたあ、とびきり濃い精子いっ、はやく
出してえ！ んんんっ！ あんっ！ んああんっ！」

リーネ「ほらほら、まんこも吸い付いてあげるからあっ！ んおっ！ くるっ！ ちんぼが
びくびくしてえ……射精くるのわかるうっ！ 出して！ お出しなさいっ！」

リーネ「んほおおおおおっ♪ きたあ♪ 執事ザーメンきたあっ♪」

リーネ「あっ、すごっ、やべっ♪ やべっ♪ おんっ、射精の勢いでえ、わたくしもイクッ、
イグウッ♪」

リーネ「んおおおっ射精交尾でイグっ！ イクイクッ！ んはああっイグウウッ！」

リーネ「おっほおおお!? イッてる！ 今イッってますわよおっ!？」

リーネ「無理無理、ダメっ、腰を止めなさいっ！ 交尾おしまいっ……くひいっ！ んおおっ！ おへえええっ……」

リーネ「んああんんっ……んんっ……」

リーネ「ああはんっ！ んなああっ！ ダメ、イグっ！ イキっぱなしいっ！ 陸上生物の底なし性欲でえっ！ またイグっ！」

リーネ「あっあっダメですわっ！ おっきいの来るっ！ すぐ来るううっ！」

リーネ「んのおおおっ!? ダメえ、イグっ！ 頭バチバチしてえっ！ 最大イキするうう！ んんんっ！ んあああっ！ おおっ！ んおおおおイグイグイグイグうう———ッ！」

リーネ「あはああんっ……ッ！ やべーですわっ！ 精液どくどく出てるうっ！ あんっ！」

リーネ「はああっ、はあっ……んあっ……連続射精……すっご……あんっ……♪」

リーネ「はあっ……はあっ……ああんっ……」

リーネ「もー、こんなに出しまくってえ……ダメですわよお……これじゃあ、受精卵たくさんできちまいますわああ……んんあっ、はあんっ」

リーネ「あっ、ダメっ……んんあっ、あんっ、んっ、おほおっ……っ」

リーネ「あっ、やんっ……んおっ、あっ、興奮してえ……んんっ、卵出る、卵出ちゃいますわあっ……んあっ……」

リーネ「んはああっ、ダメ、卵止まらないい……ドロドロの卵、たくさん出ちゃううっ、あんっ、んんっ……」

リーネ「まだお嬢様でいたいのに……お母さんになっちゃうう……あんっ……おほおっ、んんああっ♪」

リーネ「まったく……たっぷり産卵してしまいましたわ。この子たちが孵ったら……そのお世話も、執事の大事なお仕事ですからね……♪」

リーネ「もちろんわたくしのお世話も……うふふ♪」

リーネ「我が家に永久就職させてあげますので……寿命のある限り、ご奉仕してくださいませ？ ね？ うふふふふ……♪」

9B. 【玩具ルート】慈悲無し触手で人形化 ～開けてはダメ～

リーネ「そう……どうしても帰ってしまうんですね……」

リーネ「では、約束通り、小箱をお持ちください。しばらくすれば、あなたはもう樹海の浜辺に戻っているはずですわ……」

リーネ「繰り返しますが、この小箱は絶対に開けてはなりませんわよ」

リーネ「仮にわたくしを想って開けたのだとしても……あなたにとって幸福なことにはなりませんから……」

リーネ「それではさようなら……どうかお元気で……」

リーネ「あら……あらまあ……うふふふふ♪」

リーネ「あなた……浜に戻ったばかりではありませんの？ あんなに開けてはならないと言ったのに……もう、すぐ約束を破るんですから……」

リーネ「もう逃げられませんわよ……？ ざあんねん♪ かわいそう♪」

リーネ「その小箱は、クラーケンの魔法の小箱……深海にいるわたくしと、つながっておりますわ」

リーネ「不用意に開けてしまったあなたは……わたくしの触手で小箱の中に掴まれて……小箱の中で、小さな人形になっていただきます」

リーネ「わたくしを捨てて陸に戻った罰ですわ♪ まあそれでも……約束を守って、小箱を開けなければ、見逃してあげましたのに……」

リーネ「もう、慈悲はありませんわぁ♪ 小箱に食べられて、人形として、棚に飾ってさしあげますね♪」

リーネ「その触手はわたくしの触手と同じものですわぁ。言ったでしょう？ わたくしだと思って大事にして……と」

リーネ「このまま小箱に閉じ込めるんですけども……あなたはそのままだと箱に収まらないのでえ……まずは骨を折って……小さくして差しあげますわね♪」

リーネ「うふふ、今度は手加減しませんわぁ……一本一本、丁寧に折ってあげますわよお、ほおら、ぼきん……♪ ぼきん……♪」

リーネ「あらあら、痛いんですの？ かわいそう♪ 大丈夫、魔法でかわいい人形になりましたら、骨もなくなりますからね～♪」

リーネ「あら、そしたらわたくしとお揃い♪ 骨のない軟体生物ですわ～♪ おほほほ♪」

リーネ「はい、ぼき、ぼき、ぼきん♪ あらあら、もう腕も足も粉々ですわねえ♪ よ～し

よし、痛い痛いの〜とんでいけ〜♪」

リーネ「人形になりましたら、痛みも感じませんから、大丈夫ですわよ〜。さあ、もうご自分では歩けないでしょうから……触手で引きずってあげますわあ〜」

リーネ「は〜い、よいしょっ、よいしょっ……このまま、小箱の中にひきずりこんであげますわよ〜」

リーネ「は〜い、触手で無理やり小箱の中に詰め込みますわよ〜」

リーネ「あらあら……箱にひっかかって……全身の骨が砕けてますから、面白いマリオネットみたいな形になってますわねえ〜♪」

リーネ「でもめんどくせーですので、このまま力技で押し込みますわよ〜♪ そ〜れ、えいっ、えいっ、やっ……と♪」

リーネ「はああい、これであなたはあ、骨の砕かれたぐっちゃぐっちゃの軟体生物になって、箱の中に閉じ込められちゃいましたわあ〜♪」

リーネ「まあ、わたくしも骨はありませんから……これでお仲間になれましたわね♪」

リーネ「人間ならとっくに死んでますけどもお……魔法の小箱の力で、まだ意識がありますわよね〜♪」

リーネ「これからあ……その小箱の中で、あなたをお人形にしちゃいますわよお……」

リーネ「うふふ、海の中に入ったみたいですわね……」

リーネ「小箱はこれから、勝手にわたくしの屋敷に戻ってきますわ……わたくしのところに帰ってくるころには……あなたはちっちゃなお人形に変わっていますの」

リーネ「わたくしとの約束を守れなかった罰として……永遠にわたくしと一緒に過ごしましょうね……」

リーネ「ご安心なさって……人形になっても意識はありますから、ずっとわたくしの声を聴いていただけますわ……」

リーネ「退屈な海の底でも、聞いてくれる方がいればいいので……わたくしのおしゃべりに、永遠に付き合ってくださいましね……」

リーネ「ふふ……あはは……おほほほほ……♪」

(END)